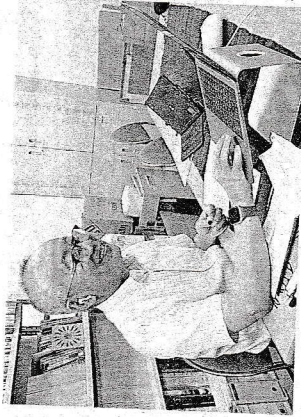


オンライン授業 大学教員の本音



立命館アジア太平洋大学で3台のパソコンを使ってオンライン授業を行う教員。2020年8月、大阪府別府市、増谷文生撮影

動画予習で効果 ■ 取り残される学生に懸念

コロナ禍を機に大学の授業のオンライン化が進むなか、教育効果が出ている学生がいる一方、多くの大学教員が「授業に取り残される学生が生じている」と懸念していることが、東大による全国調査でわかった。オンライン授業を大学教育の質の向上につなげるには、教員同士の知識・経験の共有や、大学による教員、学生への支援がカギになりそうだ。

東大が全国調査

調査は昨年12月〜今年2月、東大の大学経営・政策研究センターが実施。全国の国公私立大の教員約7300人に質問を送り、2996人（回収率41%）から回答を得た。

調査結果によると、昨年の秋学期（後期）に各教員が授業を実施した科目のうち約半数がオンラインだった。受講者が50人以上の講義のオンライン比率は70%、主に少人数で行われる「演習・ゼミ・論文指導」は42%だった。「実験実習」は26%と少なかった。

同じオンラインでも、授業ごとに使われた技術は異なる。「オンラインでの直接の指導」「（参加者をグループに分ける）プラットフォームなどを用いたグループワーク」は、年齢が若い教員ほど活用する割合が高

かった。例えば、「チャット機能などを用いた授業中の質問」は、20〜30代は43%が活用していたが、60代以上は22%だった。

各教員に学生の「授業前後の学習」を尋ねたところ、33%が対面授業と比べて「良くなった」、10%が「悪くなった」と答えた。授業前に動画やテキストで

予習し、授業後に課題をこなすスタイルが、かなり定着したようだ。一方、「授業の達成目標への到達」は「良くなった」も「悪くなった」も割増。学生への集中度、反応は「良くなった」が19%、「悪くなった」が29%だった。

教員のオンライン化への対応次第で「授業の質の差は大きくなる」と考える教員は全体の94%にのぼった。「ソフトの利用に十分な情報・訓練・サポートが提供されていない」（74%）、「情報基盤・コストのために双方向通信などの機能を十分に利用できな

い」（74%）と、大学によるハード・ソフト面の整備の不足さを指摘する教員も多かった。

また、77%が「授業に取り残される学生が生じている」と答えた。こうした現状への対応として、いずれも95%の教員が、「高リスク学生への対応」、「多くの授業で課題が出され悲鳴をあげる学生のために各授業間での負担の調整」が必要と考えていたが、実際に実施されていると答えた教員はそれぞれ62%と41%で、大学の組織的な対応が遅れている状況が浮かんた。（編集委員・増谷文生）

知見を共有し、質高めて

研究代表者 金子元久・筑波大特命教授

教員の習熟度や学生の学習意欲、さらに家庭の通信環境といった格差が、学生を二極化させている。実際に大学に来ることで情報交換が不足することで学習意欲が低下し、中退リスクを高める傾向も見られた。

それでも多くの教員は「コロナ後も、オンライン授業を大学教育に活用すべきだと考えている。大学教育の質を向上させる可能性がある」とみるためだ。

対面授業の「場」の効果も、現在のオンラインは完全には代替できていない。一方、チャットやメールで質問したり、動画

などの教材でじっくり予習したりする学生には、授業の理解度が深まる効果が出ている。

教員同士、大学同士で経験や知見を積極的に共有してほしい。コロナ禍以前の大学教育への反省や、オンライン化への疑問、批判も大切だ。新しい大学教育を形作る重要な基礎となり、エネルギーになるはずだ。

一般的にオンライン授業が対面より劣っているとは言えないことについて、社会の理解を得る必要がある。コロナ禍の経験を生かして、対面、オンライン双方の授業の質を高めることができるのか。大学、そして教員の方が問われている。

ドングリ

「オークの大樹も小さなドングリからっつていこうとわががあるんだ。小さな事が大きく育つから、希望や可能性を象徴すると考えられているよ。」

4024

◆感想や、教育に関する情報をお寄せ下さい。edu@asahi.com または FAX 03・3542・4855へ。